

育児書紹介②

『子どもの発達に共感するとき』 木下 孝司 著

木下先生は研究の為にあひる保育園にもきてくださり、その度に子どもを見る暖かい眼差しを学ばせて頂いています。本書は、保護者や教師・保育士を対象に生活の身近なところから、子どもの発達について具体的に語ったエッセイ風読み物です。読んだ方々が、子どもの輝いているところを見つけて、子どもから元気をもらうきっかけになればと綴られた本です。

子どもが実感できるように大切にしたい3つの“自分”として、誇らしい自分・今、ここにいる自分・必要とされている自分。についてや“人類お節介仮説”など興味深く、“そ～なんや～”と納得する内容です。読み終えた後に自分が少しだけ優しい人になったように思えるホッと成一冊です。

ここからは、幼児期の育ちを経てどんな思春期を迎えるのか?という視点の書籍を紹介します。あっ!という間に小・中学生・高校生・成人へと成長していく子ども達です。将来の我が子は、どんな姿になっていくのか? 楽しみ半分不安半分…?

『教育という名の幻想』 秋葉 英則 著

私が保育士になりたての頃、秋葉先生の講演を聞いて感動して涙がでました。その講演内容の本です。当時、少年犯罪が多発する世の中で、今の子どもは「がんばれ!がんばれ!」と応援され大人からの評価が最大の価値になっている。頑張っても頑張っても評価されない子どもはつらい思いをしている。頑張った先に何かあるのか?大人がそれを示してくれますか?今の効果を急ぎ、効果が早く生まれる事をもとめすぎてませんか?そんな事を問いかけてくれる内容です。そして、今の親は子どもを思い「将来、子どもの世話にならない」を美德とする傾向にある。しかし、「年をとったらあんたらの世話になりたい」と子どもを当てにする親子相互依存を大切にしてほしいと綴られています。

『子ども力をはぐくむ』 森川 紘一 著

大阪で31年間、小学校教師をされていた森川先生が教師としての自分の実践に加えて非行や不登校などの問題とどう向き合ってきたかが詳しく綴られています。その他にも、9歳頃までに誕生する「自己中心性の器」と9・10歳を境に誕生する「思春期の心の器」についてや啐啄（そつたく）にかなう子育て等、乳幼児期に大切にしておきたい関わりが詳しく記されています。